

「おんみょうがん陰陽眼の少年」

(ペンネーム)

哩歩子

* あらすじ

軽業一座にいる竜登は、吸血鬼と人間との混血児だ。大人の体になるまでに吸血鬼を倒さないと、彼もなってしまう。そのため、額にある「陰陽眼」という幽霊を見ることのできる能力をつかって吸血鬼を探していた。明治十五年竜登が十三歳の時、北海道の樺戸集治監という牢獄に吸血鬼がいるとわかる。この看守達の剣術師範は新撰組の生き残りの永倉新八で、吸血鬼は永倉の小間使いをしている、緋沙という美しい女だ。

初めは彼女の正体に気づかず憧れを抱く竜登だが真実を知る。緋沙は自分の存在を呪い、死にたいと思いつつも果たせないでいた。彼女が吸血鬼になったのは夫だった黒田清隆がその野心を悪霊につけこまれたからだだった。竜登は陰陽眼や、銀でできた銃弾を使って緋沙を倒す。新撰組の幽霊も加勢してくれた。自分が人間になれたことと引き換えの、悲しい別れ。翌朝、竜登は体の変化にきざしを感じ、大人への境界を越えたことを知る。

* 人物表

りゅうと 竜登 (13) 軽業一座の少年・人間と吸血鬼の混血児

ひさ 緋沙 (22) 永倉新八の小間使い・吸血鬼

ツバキ (32) 竜登の母親・軽業一座の座長
五寸釘の寅吉 (28・87) 脱獄魔・強盗(義賊)

永倉新八(杉村義衛・43) 監獄の剣術師範・元新撰組

五郎丸 (35) 軽業一座の座員

悪霊

黒田清隆 (42) 元北海道開拓使の長官
川路利良 (45) 大警視(近代警察の骨格を作った人物)

看守長 (50)

近藤 勇 (34) 幽霊

土方歳三 (34) 幽霊
沖田総司 (24) 幽霊

客1、2、3 芝居小屋の客

見世物小屋近くの喧騒。

呼び込み「さあさあ、西洋がえりの軽業だ。
木戸銭はたったの十銭だよ」

竜登(MO)「僕は竜登、十三歳。ツバキ母
さんがやっている軽業一座にいる。毎朝母
さんは楽屋で、僕が子供であることを確認
しようとする……」

逃げ回る足音と、追いかける足音。

ツバキ「待ちなさい！竜登！」
竜登「いやだ！見ないで！」
五郎丸「ほーら、捕まえた」
竜登「うーっ、五郎丸の裏切り者！」
五郎丸「竜登、観念して座長を安心させな」
竜登「母さんに見られるのはいやだ」
ツバキ「しょうがないねえ。五郎丸、代わり
に見ておくれ」
五郎丸「はい。……変わりなしです」
ツバキ「本当に？きざしもないんだね？」
五郎丸「はい。こんなんじや、まだまだだ」
竜登「五郎丸のバカ」
ツバキ「よかった！さあさあ今日も大入り満
員。いい芸をお見せしようじゃないか！」

あちこちから「おうーあいよ」の声。
賑やかに三味線が鳴らされ、ドヤドヤ
と部屋を出て行く気配。

竜登(MO)「(深いため息)大人の体にな
る前に、僕は成し遂げなければならぬこ
とがある。それをしないと……僕は吸血鬼
になっちまうんだ」

M ミステリアスな音楽

大勢の拍手

ツバキ「東西東西、ただ今から当一座の花形
ボーイ、竜登が目隠しをしたまま綱渡りを
してご覧にいれまーす」

小太鼓の連打

客1「金髪だよ、なんて可愛い子だろ」
客2「異国からさらってきたんじゃないの」
客3「凄い！まるで見えているようだな」

竜登(MO)「本当にみえてるんだよね、僕。
額の所にある陰陽眼という、外からは見え
ない眼のおかげ。感度が良すぎてこの世の
ものではないものまで見えちゃうんだ」

ツバキ「お次はこの空中の綱から、トンボを
切って皆さまの所に飛び降ります。どうか
御迷惑でも支えてやって下さいまし」
緊張感を高める、小太鼓の連打。

竜登「ヨオーツ、ハイ！」

観客の悲鳴。鋭く風を切り飛び降りる。
ガシッと受け止める音。

寅吉「オツと、あぶねえ」
竜登「おじさん、ありがとう」
盛大な拍手。

竜登(MO)「でもこのおじさんは僕を抱い
たまま離さず、なぜか僕の首飾りを食い入
るような目つきで見ている」

寅吉「鎖の先にあるのは鉄砲の弾だな」
竜登「そうだよ。でもタダの弾じゃなくて、
銀製の。吸血鬼を倒すためのものだもの」
寅吉「おい、今何て言った！」
竜登「く、苦しい、手を離してよ」

M 不思議さを感じさせる音楽。

ツバキ「貴方がどんな牢からも脱獄するとい
う、あの有名な五寸釘の寅吉さんですか」
寅吉「へい。大きな声では言えやせんが、で
きたばかりの権戸集治監ってえ、どでけえ
監獄から抜けてきやした」

竜登「『五寸釘』なんて、変な名前だね」
五郎丸「この明治の御代の鼠小僧さ」
ツバキ「そうそう、警官に追われて窓から飛
び降りたとき、五寸釘を踏み抜いたけど、
そのまま三里も走ったんでしょ」

寅吉「まあ、そんなこともありやしたっけ」
ツバキ「で、この首飾りが、何か？」
寅吉「へい。実は、夜な夜な権戸の牢獄に來
て地を吸う化け物から、仲間を救うために

脱獄したんでさあ。耶蘇の坊さんから『吸血鬼を倒すには特別な銀の銃弾が効くはずだ』と聞きやした」

M 無気味な音楽

寅吉「夜、あつしらが眠つてると……」

鈴の音が近づく。

寅吉「牢の様子を、薄紫色に光る霧のようなものが通り抜けてきた。霧は鼠の姿に変わって囚人たちの首筋に取り付いて血を吸いやがった。吸われた奴が目覚まさないうちに鼠は次の囚人に移って」

男たちの低いうめき声。

移動していく鈴の音。

寅吉「看守に言っても、信じちゃくれねえ。

血を吸われて体力が落ちた者でも情け容赦なくこき使う。囚人はいくらでも代わりがある。死んだら死んだで、かえって経費がかからなくていいんだとさ」

ツバキ「北海道に行かなくちゃならない」

五郎丸「竜登、いよいよだな」

竜登「ええつ、いやだ、ぼくいやだ！」

荒れ狂う波の音。舟の櫓を漕ぐ音。
竜登が吐いている。

五郎丸「なんだ竜登、今頃になって船酔いか？」

ほら、北海道が見えてきたぞ」

竜登「吸血鬼になるってそんなに悪い事？」

五郎丸「人間じゃなくなるんだぞ。お前一人で別な世界で生きていかなきゃならない」

ジャラジャラと鎖の音。

五郎丸「何をやる！ま、まさか首飾りを」

竜登「どうせ僕って化け物なんだ。こんなものいらぬ！」

ピューツと何か飛んでくる音。

グサツと甲板にそれが突き刺さる音。

竜登(MO)「僕が海に捨てようとしたとき、

母さんの三味線の撥が飛んできて、首飾りを甲板につなぎ止めた」

竜登「母さん……」

ツバキ「お前は人間なんだ。人間の子だよ」

M しみじみとした音楽。

枯れ枝を踏みしめて進む複数の足音。

竜登「この先に本当に人なんているの？」

寅吉「ああ。樺戸まではもう一里もねえよ。

あそこには、囚人ばかりじゃねえ、看守も大勢だ。看守に剣術を教える先生は、中々の使い手だつて噂だぜ」

頭上を掠める鋭い鳥の鳴き声。

ツバキ「だからこそ、軽業じゃなくて撃剣興

行の一座に仕立てたんだよ。何の楽しみもない、最果ての地にある監獄だろ。看守との剣術の試合を申し込んだら、案外認めてくれるかもしれない。とにかく中に入らな

きゃ、誰が吸血鬼かわからないからね」

寅吉「もう少しで懇意にしているアイヌ部落

に着きやす。さすがにあつしは樺戸までは行けねえ。皆さんが本懐を遂げて戻られるのを、そこで待つていやす」

五郎丸「しっ！静かに！何か来る」

小走りの足音が近づく。

少し遠くで熊の吠え声。

五郎丸「熊だ！」

女の荒い息遣いがこつちに来る。

熊の咆哮も近づく。

遠くで大勢の人の叫び声がしている。

竜登(MO)「熊に追いかけていたのは、

若い女の人だった。でもその人は突然クルリと振り向いて熊と向き合ったんだ」

緋沙「熊よ！あなたは今日、尊いカムイとな

つて、親神様の元に帰られるのでしよう。私を食べてもいい！その代わりに教えて。私は何のためにこの世に来たのでしょうか」

ひととき大きな熊の咆哮。
竜登「あつ、危ない！」

鋭い金属音。竜登の荒い息。

明日の風が吹く』っていうんだよ」

寅吉「く、熊が動かなくなつた！」

ツバキ「（声を潜め）見たかい！」

五郎丸「ええ。竜登の額から光が出て、それが当たったとたん熊が動かなくなりました。陰陽眼にそんな力があつたなんて」

ツバキ「額の眼が活性化してきたんだ。大人になるのが迫っているのかもしれないね」

駆け寄る足音。

竜登「お姉さん、大丈夫？」

緋沙「（眩く）また死にそびれてしまった」

竜登「えっ？」

緋沙「いえ、助けてくれて本当にありがとう。」

私は緋沙よ」

竜登（MO）「すぐきれいなお姉さんに見

つめられて、僕は胸がドキドキしている」

ムツクリの音。アイヌの祈りの声。

ツバキ「へえ、お緋沙さんは、樺戸監獄の剣

術師範の所で働いているんだ」

緋沙「はい。ご主人の杉村さまは、元の名前

を永倉新八と言つて、新撰組の中でも、

一、二を争うほどの腕前だったとか」

寅吉「そんな人に試合なんか申し込んだじゃつて、いいんですかい？」

ツバキ「こういう時、アメリカじゃ『明日は

M 三味線で一節、南北戦争の頃の曲。

五郎丸「お緋沙さんはどうしてここに？」

緋沙「旦那様のために、アイヌ秘伝の薬草を買いに来たのよ。息切れを止める薬、耳が

良く聞こえる薬、それに……」

ツバキ「（冗談で）不老長寿の薬とか？」

緋沙「ええ。旦那様には不老長寿の薬。私に

は（低く眩く）滅びのお薬が欲しい」

チリンと鈴の音。

寅吉「（鈴の音に反応して）おや？」

緋沙「旦那様は死んでいった仲間の代わりに

一日でも長く生きたい。そうして新撰組の

汚名を晴らしたいんですつて」

M しみじみとした音楽。

竜登（MO）「樺戸という所にある監獄は、

どこまでも高い塀が続いていた。お緋沙さ

んが剣術師範に話してくれたおかげで、僕

たちは『撃剣興行 日の本ツバキ一座』と

いうのぼり旗をたてて、堂々と中に入った」

大勢のざわめき。ドーンと太太鼓の音。

ざわめきが収まる。

永倉「今から、対抗試合を行う。心は常に戦場に在り。今日はいかなる手段を用いても

相手を倒した方を勝ちとする」

竜登「（小声で）あの長い白いひげのおじいさんが元新撰組の永倉先生？」

緋沙「そうよ、私のご主人さま」

永倉「始めっ！」

「キエーッ！」という鋭い気合の直後に激しい竹刀の打突音。

「トリヤーツ！」

「グエツ」

「ドタン」

永倉「勝負あり。西方、看守の勝ち」

ツバキ「ああ、もう負けちゃった」

竜登（MO）「その後も僕たちは負け続けた」

永倉（OFF）「勝負あり、西方の勝ち」

見物人達の、軽蔑が混じった笑い声。

ツバキ「だらしないねえ、次は私が行く！

悩殺流免許皆伝、赤井ツバキ、いざ見参！」

五郎丸「座長、次は俺の番ですよ」

ツバキ「あ、そう」

緋沙「竜登は出ないの？」

竜登「うん、僕、今大事な仕事をやっている」

ツバキ「五郎丸、見せつけておやり」

竜登（MO）「さっきから僕は、陰陽眼を使つてこの中に吸血鬼がいなか探していた」

緋沙「なあに？竜登の大事な仕事って？」

竜登「吸血鬼っていう鬼を探してるの」

緋沙「えっ！」

竜登「僕、人間と吸血鬼との間にできた子供なんだ。この首飾りの先につけてある鉄砲の弾で、大人の体になるまえに吸血鬼を倒さないと、僕もそうなっちゃうって」

緋沙「(呟く) 何ですって」

M 不穏な音楽。

竜登「僕はこの世のものではないものが見えるんだよ。永倉先生の後ろには新撰組の羽織を着た幽霊達が見える。みんな今日の試合を楽しんでるみたいだよ。あっ……」

緋沙「だいじょうぶ、あなたがどんなになっても私がきつと面倒を見てあげるわ」

竜登(MO)「お緋沙さんは僕の後ろから目隠しをした。その手はとても冷たくて、刃物を当てられたみたいだ」

駆け込んでくる足音。

永倉「看守長か。どうした」

看守長「緊急招集です！もうすぐ黒田様がお忍びでお見えになる！」

いっぺんに騒然とする場内。

ツバキ「だれです？黒田様って」

看守長「この2月まで、北海道開拓使の長官

だったお方だ」

永倉「ふん、奴は薩摩出身じゃ。薩摩系の役人や商人に有利な条件で土地や工場を払い下げようとしている欲張った俗物じゃ」

看守長「師範、滅多なことでは言わぬ方が」

永倉「仕方あるまい。試合は中止じゃ」

大勢が、ガヤガヤと移動する音。

ツバキ「(小声で) 竜登、この人達に紛れて

行きなさい。アレを探す絶好の機会だよ」

竜登「母さんは？」

ツバキ「私も行くと思立ってしまっ。後から

必ず行くから。さあ、この拳銃を持って」

竜登「(泣きそうな声) でも……」

ツバキ「お前には陰陽眼がある。熊の動きだつて止めることができただろう。さあ、行きなさい。人間になるんだよ」

竜登(MO)「母さんに背中を押され、看守たちに揉まれながら、僕は道場の外に出た」

M 不穏な音楽。

小走りの下駄の音。荒い女の息遣い。

緋沙「黒田清隆……ああ、もう少しで思い出せそう。そうだ、あの晩黒田様は酷く酔っていらしたのだわ」

酒壇を薙ぎ払う音。緋沙の悲鳴。

黒田「(酔ったダミ声) 待て、緋沙！」

刀を振り回す音。

緋沙「刀をお納め下さい、どうかお許しを……」

狂ったような黒田の笑い声。

途中から悪霊の笑い声に変わる。

緋沙「あっ、お前は黒田様ではない！」

悪霊の哄笑。

黒田(悪霊)「うりゃあ！」

斬りつける音。

緋沙の断末魔の悲鳴。

緋沙(MO)「私の棺桶を開けたのは、薩摩の川路利良大警視。黒田様が乱心して私を切り殺したという噂が流れたせいで、新聞記者たちの前で墓を掘り起こしたの。閉じられた瞼の上に月の光が射すのを感じたわ」

川路「(大声で) これは病死である。吾輩が今、確かに確認した！」

緋沙(MO)「月の光に吸い出されるように、私の体は霧になって蓋の隙間から抜け出ていった。次に気が付いたときには咽喉が酷く渴いていたわ。それはいくら水を飲んで、決して癒えない渴きだった」

M 悲しい音楽。

枯れ枝を踏みしめて歩く音。

竜登「あ、あれはお緋沙さんだ。あの丸太小屋に入ったな。僕も行ってみよう」

走っていく足音。

竜登(MO)「窓から中を覗くと、お緋沙さんは着物を脱いで手鏡で自分の背中を覗いていた。そこには斜めに刀傷が……。でもその時、部屋の隅にあった藁の束の中から、柿色の囚人服を着た男が出てきたんだ」

囚人「ヒヒヒ、いい女じゃねえか」

緋沙「あつ！」

二人が揉み合うたびに鈴の音がする。

竜登(MO)「危ない！そうだと陰陽眼で……」

あれ？お緋沙さん笑ってる。そのまま囚人と一緒に倒れこんじゃった」

男の荒々しい息遣い。

竜登(MO)「頭がボウツとする。体が熱いよ」

寅吉「おっと、子供が見るもんじゃねえ」

竜登(MO)「後ろから目隠しをしたのは、アイヌ部落で待っているはずの寅吉さんだ。でも僕の額にある眼は、白目を剥いて動かなくなった囚人を見ていた。口についた血を舌で舐めとっているお緋沙さんの姿も」

寅吉「あの女が怪しい、と教えるために来た」
竜登「お緋沙さんが、あのお緋沙さんが……」

寅吉「伏せろ！緋沙が窓の所に来ている！」

緋沙「早く死にたいと思っていた。でも、黒

田に会うまでは生かしておいて……」

竜登「(小声で)見つかったる！」

寅吉「(小声で)シツ、静かにしろい！」

戸が開く音。

寅吉「ちつ、緋沙が出て来やがった」

複数の馬が走り来る。嘶いて止まる。

竜登「あつ、母さんが来た。五郎丸！それに

永倉先生も！」

緋沙「旦那様……」

永倉「緋沙、大事ないか。いや、いい。変な

事を申す者がおつてな。さあ帰ろう」

竜登(MO)「お緋沙さん、いや吸血鬼は師範に深くお辞儀をした。けど次の瞬間には遙か遠くを飛ぶように移動していった」

永倉「おおつ、なんと！」

ツバキ「みんな、追いかけるんだ！」

疾走する複数の馬の音。鞭を鳴らす音。

竜登(MO)「僕は馬を走らせる五郎丸の腰に必死に捕まっている。後ろから母さんと寅吉さん、永倉先生も来ている。あんな気味の悪いお緋沙さんは人間じゃない。僕は、全力で立ち向かおうと決心した」

M 西部劇のような音楽。

カラカラと、砂利道を馬車が進む音。

ドサツと何かが落ちて来る音。

馬が嘶き、止まる。

緋沙「黒田さま」

M ミステリアスな音楽。

黒田「あつ、お前は！まさか……信じられん」

緋沙「あなたに取り憑いている邪悪な獣に一度は殺されましたが、どういうわけかこうして生き返っています」

黒田が笑い出す。その声が薄気味悪く、

下卑た声に変わっていく。

黒田(悪霊)「俺たちは世の中が混乱すればするほど嬉しいんだ。黒田のがむしやらな生き方は、俺の欲望を叶えるのにぴったりなんですね。まだまだ利用させてもらおうぜ」

緋沙「正体を現したわね。悪霊！私が今あるのは、お前を倒すためだったのね。(緋沙は無気味な唸り声を発する)」

駆けて来る複数の馬の蹄の音。

馬は嘶いて止まる。

緋沙「竜登！」

竜登「ヨオーツ、ハイツ！」

竜登(MO)「馬から飛び降りた僕は、お緋沙さんにびたりと拳銃を向けた。母さんは

その向こうにいる、立派な髭を生やした男の人に馬で近づいて声を掛けた」

ツバキ「黒田様、ここは危ないですから、私の後ろに乗ってください」

緋沙「(絶叫) そいつは悪霊なの! 離れて!」

黒田「フフフ」

衝撃音。

ツバキ「あ、ああーっ!」

竜登「母さん!」

五郎丸「座長!」

悪魔の哄笑。

竜登(MO)「黒田様の体から、気味の悪い顔をした悪霊が抜け出し、母さんをぐいと引っ張った。母さんを楯にしてニヤニヤしている。ダメだ! 弾が母さんに当たっちゃもう」

ツバキ「(叫ぶ) いいのよ、撃ちなさい!」

竜登「母さん!」

緋沙「竜登、弾、一発しかないんでしょ。それは私にとっておいてね」

竜登(MO)「お緋沙さんは僕に微笑みかけたかと思うと、悪霊をカッと睨みつけた。その顔がみるみるうちに、赤い眼を持った、紫色の巨大な鼠になった。そして悪霊に飛びかかって行ったんだ」

この世ならぬ者達が咆哮し合う。

寅吉「お緋沙も悪霊に飲み込まれちゃった!」

永倉「緋沙、神道無念流免許皆伝の杉村が、いや新撰組の永倉新八が今助けに行くぞ」

五郎丸「止めた方がいい。ムダ死にです」

竜登(MO)「止めるのを振り切って切りつけた永倉先生も逆に捕まってしまった」

五郎丸「竜登の陰陽眼を使うんだ。悪霊の動きを止めたら何とかなるかもしれない」

竜登「う、うん」

竜登(MO)「僕は眼を閉じ、強く念じた。

生まれ、生まれ、生まれーっ!」

強い金属音。

竜登(MO)「奴は母さん達を掴み動きを止めた。お緋沙さんも悪霊の胸に透けて見える」

五郎丸「寅吉さん、今だ、行こう!」

寅吉「おう! このやろう! このやろう!」

ガンガン殴りつける音。

竜登(MO)「だめだ! 母さん達を悪霊から引きはがすことができない。でもその時…」

近藤「坊やどきな。こいつらは俺らの領分だ」
竜登「あ、あなたは…!」

M 勇気が湧き出る音楽。

竜登(MO)「いつのまにか僕らの後ろに『誠』の旗をたて、だんだら模様の羽織を着た大勢の武士がいる。でもその姿はうっすらとした上半身だけ。新撰組の幽霊だ!」

近藤「天然理心流免許皆伝、新撰組隊長、近藤勇参上」

土方「同じく副長、土方歳三、いざっ!」

チャリンと刀を抜く音。太刀風。

竜登(MO)「幽霊達が刀を揮うと、母さんと永倉先生が悪霊の手から転がり落ちた」

ツバキ「ああ、助かったよ」

永倉「どうして助かったのか、不思議じゃ」

沖田「新撰組一番隊長、沖田総司参上、悪霊め、これでどめだ!」

しかし悪魔の哄笑。そして咆哮。

竜登(MO)「ああ沖田さんが止めを刺す前に悪霊がまた動き出した。新撰組の幽霊はもう消えてしまった」

緋沙「(か細い声で) 竜登、早く撃って」

竜登「お緋沙さん……」

悪霊「殺る気か？小僧。この女も死んでしま
うぞ。お前にそんな度胸があるのかな」

緋沙「殺して。私を獣のままにしないで！（途
中から獣のような声に変わり）こつちにお
いでえ……竜登お……私はずーっと面倒
見てあげるからあ」

竜登「わあああーっ！」

銃の発射音。短くお緋沙の叫び声。

悪霊の断末魔の咆哮。

竜登（MO）「悪霊は消えた。そして人間の
姿のお緋沙さんがそこに倒れていた」

永倉「お緋沙っ！」

皆でかけよる足音。

緋沙「（切れ切れの声）竜登、ありがとう」

竜登「ごめんなさい、本当にごめんなさい」

緋沙「（か細い声で）たくさん囚人がいたの
で、一人から貰う血は少しですみます。で
もそんな自分が情けなかった」

竜登が泣き出す。永倉も鳴咽。

ツバキ「竜登、お前の手を貸してごらん」

竜登（MO）「母さんは僕の手首に小刀を当
てた。『ほた……ほた……ほた……』お緋沙さん
の唇に僕の血が滴り落ちた」

緋沙「（呻くように）う、うう……」

ツバキ「竜登の血は人間のきれいな血だよ」

竜登（MO）「お緋沙さんの眼が一瞬だけ狂
おしそうに光ったけど、すぐに澄み切った
眼になって僕を見つめた。そして……（劇
的な効果音）微かに僕に微笑んだ次の瞬間、
灰になってしまった」

M しみじみとした音楽。

鳥の囀り。川のせせらぎ。

川で布を洗う音。

竜登（MO）「明け方に、僕は息苦しい夢を
見た。そして、眼がさめたとき、僕の体が
変わったことを知った」

ツバキ「（OFFで）寅吉さんもう行くのか
い。あら、竜登は川で何を洗ってるんだろ
う」

寅吉「（OFFで）こんな時、母親ってえの
は知らんふりをするもんですぜ（笑う）」
布を洗う音が続く。

竜登（MO）「（壮年の声）私、竜登が再び
寅吉さんの姿を見かけたのは、何十年もた
った昭和十六年の冬、浅草の演芸場だった」

呼び込み「さあ稀代の脱獄囚五寸釘の寅吉の
一代記だ。お代は見ての（徐々に小さく）」
寅吉「（老人の声）そんな時の黒田ってえのが、
その後日本で二番目の総理大臣になった」

客たち「ほおーっ」

客1「で、竜登は今どうしてるんだい？」

寅吉「さあな。また会えてえもんよ。世の中
が乱れば乱れるほど嬉しがる化け物が、
最近はまだ誰かに取り憑いていやがるみて
えだからな。おや？そこにいるのは、まさ
か……。待て、待ってくれ！」

大本営発表の、真珠湾攻撃のニュース
の音声。戦闘機が飛ぶ音。

（終わり）